

第2講 調査的面接の方法

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 面接の実際の手順

1 宿題

20分以上の面接調査を行い、トランスクリプトを書き起こして、11/7 授業時に3部持ってくること。(1部は提出、残りを討論に使用)

- 対象者は誰でもよい。録音すること、書き起こして授業で使うことについて了解を得ておくこと
- 面接を行う場所は各自で手配する。食堂や喫茶店でもよいが、あまり騒がしいと録音がきれいに取れないので注意。屋外は避けたほうがよい。
- 録音は研究室のICレコーダを使用してよい(「機材持ち出し表」に記入して借りること)
- トランスクリプトの書きかたは特に制限しないが、対象者・面接者それぞれの発言と説明部分とがはっきり分かるように工夫すること(教科書や既存の論文を参照)
- テーマは自分の調べたいことを自分で選んでよい。思いつかない場合は、たとえば大学に入って驚いたことや戸惑ったこと、卒業後の進路について(対象者が学生の場合)、出身地の方言、対象者の家族に特殊なことばや習慣、健康のために心がけていること、好きな食べ物など、適当に決めること。
- インタビューの言語は日本語でなくてもよいが、その場合にはトランスクリプトに簡単な注釈をつけること

2 シナリオの作成

自分の決めたテーマに沿って、どのような質問をするか、答えによってどのように話を進めるか、おおまかな流れと時間配分を決める。

調査目的の説明や、信頼感を形成するための自己紹介や雑談、話を進めるためのつなぎの話題なども考えておくこと。

3 当日までの準備

- 当日の約束をきちんととること
- 会場の確保と、機材の確保・試し録り
- 書きとるためのメモ用紙(シナリオを流用するとよい)
- 対象者に提示する資料や、書いてもらう質問紙(もし必要なら)

4 録音

ICレコーダの操作方法を確認しておくこと。特に、「録音中」であることがどこでわかるか、「ホールド」状態の設定と解除、電池残量など確認。

通常は、マイクは無指向のまま、机の上などにおいておけば十分である。対象者に、録音していることをなるべく意識させないほうがよい。

録音に完全に頼るのではなく、面接中はその場でメモを取りながら聞く（用紙をあらかじめつくっておくとよい）。

面接終了後、すぐに録音を再生して、きちんと取れているか確認する。もし失敗しているようであれば、できる限り早く、記憶をたどってメモを作り直す。

5 書き起こし

書き起こし作業は、出来るだけ早く（記憶が新しいうちに）はじめる。

ICレコーダのデータは、USB (mini-B) ケーブルでPCにコピーできる。「フォルダーを開いてファイルを表示」を選択し、フォルダを開いて、ファイルをPC側にコピーする。

研究室PCでは、「おこしやす2」(Okoshiyasu2) が使える。起動時に「ファイル読み込み時にエラーが発生しました」などといわれることがあるが、気にしなくてよい。「おこしやす2」のウィンドウにファイルをドロップすると再生できるようになる。

- 停止するたびに3秒前に戻る
- 適当な区間を設定して繰り返し聞くことが可能
- 操作を任意のキーに割り当てできる（くわしくは、開発者 Mojo さんのサイト <<http://www12.plala.or.jp/mojo/>> を参照）

別の方法として、音声ファイルを再生しながら、自分の声でその内容を復唱してスマートフォンなどで音声認識させる方法もある。<http://note103.hateblo.jp/entry/2016/07/10/141451> や <http://togetter.com/li/1158214> など参照。

いずれにしても、聞き間違いや変換ミスが多発するので、再度聞きなおして修正する。

ファイルをコピーできて全部聞こえることがわかったら、ICレコーダのデータは消去して、返却すること
トランスクリプトには、次の3種類の情報が載ることになるので、一定の規則で区別する。

- 面接者の発言
- 対象者の発言
- 状況の説明など

教科書 p. 69, 86 の例や、前回読んだ卒業論文等の書きかたを参考にするとよい。

「状況の説明」には、対象者の様子や、身体的な動作、音声的特徴、沈黙などについて、解釈上参考になりそうなことを書く。たとえば、「ため息をつく」「声をひそめて」「笑いながら」「 を指さして」「5秒沈黙」など。会話分析や音声分析ではないので、あまり細かく記録する必要はない。

聞き取れないところは、適宜説明を加えるか、記号などを決めて記述する。

録音時間の5倍以上の時間がかかると考えて、書き起こしのための時間を確保しておくこと。